
ヴァジュラ

シンイチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァジュラ

【Nコード】

N6074A

【作者名】

シンイチ

【あらすじ】

ヴァジュラ：稲妻を象徴する金剛杵。

1 雷光

露木啓治は頭を抱えて座り込んでいた。

放課後の教室。春はもう間近というのに、窓の外には闇が広がっている。所々に街灯のぼやけた光が点々と見える。

「なんか、ウザいんだよね。」

また一発、啓治の懐に蹴りが入った。

啓治を囲んで見下しニヤニヤする三人は、また相談し始めた。露木啓治にどんな裁きを下すかを。だが、啓治が裁きを受けようが受けまいが、啓治の罪は晴れることはないのだ。この三人と一緒にいる限り。

いつからだ？ そうだ、ちょうど一年前だ。

我が家は父が会社に勤め、母は専業主婦で子供は啓治一人の一般的な家庭だった。そして、父は大手企業の幹部として働いていたので比較的、裕福な家だった。

そんな中で過ごしていた一年前。父の勤務していた会社の社長が会社の金を横領したらしかった。しかし、その社長は罪を逃れるために、幹部であった啓治の父に責任転嫁したのである。

その結果、父は会社からも世間からも見放され、深い深い溝に落ちた。そして、もとの人生という道に戻れなくなった父は、啓治と母を残していなくなった。

警察にも届けたが、見つからなかった。今ごろ、どこかで死んでいるのかもしれない。死を迎えてまで孤独な父。責任転嫁した社長が憎かった。だが、何もできなかった。行動を起こそうとすると、会社の部下が家の周りをうろついたりしだしたからだ。

一家の大黒柱を失った家族というのは、まさに家から大黒柱を引っこ抜いたように崩れてゆく。

母は父の蒸発を受けて、今まで酒もタバコも飲まなかったのに、人が変わったように両方飲み始めた。さらに、家のお金で賭け事ま

で始めてしまった。

以前の父のように道から逸れてしまったのだ。

母は逆に啓治にはまったく関心を示さなくなった。まるで、幼児が飽きてほっぽり出した玩具のような気分だった。数ヶ月前まではテストや通知表を嫌というほど見せさせられたが、今は、口すらきかなくなった。

そんな日々が何ヶ月か続いたころ、母は再婚した。母は豹変した後、夜遅くまでどこかの店で飲んでできているようだった。そこで知り合った人らしかった。

その男は姓を露木といった。今まで、父の姓である相場を名のっていたのだが、改姓することになったのだった。

もちろん、飲み屋で知り合った男などろくな人間ではなかった。二人そろって啓治をいないものとして扱うのだ。その男はともかく、今まで生活し、育ててもらった母　今となつては豹変しきつているが　に無視されるのは多少ながら心が痛んだ。

そのうち、その二人だけでなく、中学の友達の目も変わっていった。

父の失踪の件ではみんな、気を使ってくれていたようだが、今度はそうはいかなかった。

姓が変わるといふ外から見える変化をあるグループに目をつけられたのだった。

それは周囲に「いじめっ子」と確認されている子達ではなく、俗に言う「ごく普通」の三人組だった。「ごく普通」だからストレスがたまるのだろうか。でも、その「ごく普通」だからストレスの吐き出し口もない。「いじめ」としてストレスを発散させるには自分たちより弱くて、先生に漏らさない人材が必要になってくる。それが啓治だったのだ。

露木啓治は背が高く、大人びた顔つきをしているが、気が弱く、背丈の割りにひよろつとしていて力もないし、頭もさほどよくない。そんな露木啓治という銃身と改姓という引き金があつて、こんなこ

とになってしまったのだろう。

しかし、もうすぐ春だ。中学3年生の啓治は今年で卒業である。この三人組とも違う高校へ行く。そうすれば、自由の身になることができる。釈放されるのだ。

そんな思いにすぎり、もう少しの辛抱だと自分に言い聞かせ、啓治は仕打ちに耐えていた。

どうやら三人は話し合いを終えたようだ。そのうちの一人が机の上においてあった通学鞆から何かを取り出した。銀色に光る何かが見えた。啓治はそれがなにかを理解したとたんに、血の気が引いていくのがわかった。

ナイフだった。

何故だ。今までは、凶器による仕打ちはなかった。何故だ。

ナイフをもった一人はにやけながら近寄ってきた。ナイフを見たときの啓治の反応を楽しんでいるようだった。そして言った。

「露木君？ 中学を卒業したら逃げられると思ってたんでしょ？」

心の中を見透かされたような気がしてぞくつとした。なんとかそれを顔に出さないように頭を振ったが、どうやら失敗したようだ。

「あ、やっぱり逃げられると思ってたんだね。でも、このままお別れっていうのも寂しいから、こいつで殺してあげるよ。」

啓治は先ほどナイフを見たとき以上の恐怖を覚えた。

良い意味ではないが、露木啓治は彼らにとってなくてはならない存在だったから、「殺し」までは発展しないと思っていた。だが、発展してしまった。

三人はニヤニヤしながらさらに近づいてきた。啓治は鼓動が加速していくのを感じた。この三人の玩具として殺されてしまうのか。頭を抱える手に力がある。まだ、この時期は寒いくらいなものにもかかわらず、手には汗がにじんでいた。あたりの音が一切聞こえなくなった。五感までおかしくなってしまったのか。

死にたくない。

その気持ちだけは、おかしくなかなっていなかった。

死にたくない。

そう思った瞬間、窓の外の闇を金色の光が切り裂いた。その光は槍のように鋭く窓ガラスを突き破り、三人を直撃した。

三人は一瞬にして灰になった。

その光はまるで音のない雷だった。

光自体には雷のような音はなかった。窓ガラスの粉碎する音は甲高く響いたが。

啓治は三人が死んだことよりも、あることに驚いていた。

三人を灰にした光は、いや雷は露木啓治自身が出現させたことに。

1 雷光（後書き）

感想をお願いします。

2 雷痕

家に帰るとちゆうだった。近くで強い光が見えた。その瞬間、甲高いガラスの割れる音がした。どうやら、すぐそこに見える中学校から聞こえたようだった。

彼女は迷わず、そこへ走り出した。

もう、学校には先生ぐらしか残っていないようだったが、ドアは開いていた。中をのぞくと教職員らしき人物数人が階段を上がって行くのが見えた。彼女はその後を追った。

教職員たちが3、2という札のかかった教室に入っていくのが見えた。またもや、彼女は彼らについて教室にまで入ってしまった。

そこには十人近くの教師と見受けられる人たちが円を作っていた。その中の一人が、教師でもない彼女が入ってきたのを見つけた。

「あなたは、だれですか？」

少しヒステリーの入った女性教師だった。

たいていの人物ならこの大きな甲高い声に驚くだろうが、彼女は驚かなかった。そして、内ポケットから警察手帳を取り出して言った。

「この近くの警察署の刑事の谷岡香織です。強い光とガラスの割れる音がしたもので。何があったのですか？」

そこにいた教師全員が啞然とした顔つきで香織を見つめていた。

先ほどの大きな声にも、そんな顔で見られるのも慣れっこだった。刑事になってもう五年にもなるからだ。

少しの間をおき、彼らはハツとして円陣を組んで眺めていたものが香織にも見えるように円を崩した。

そこは教室の後方の中央だった。奥の壁は掲示板になっており、「合格おめでとう」などのプリントが画鋏でとめられているのが見えた。

教師たちは、まるで香織がモーゼの杖を使ったように綺麗に二つ

に割れていた。その教師たちの中央にあるものが目に入った。香織の頭の中に過去の映像が流れるように入ってきた。そして、はち切れんばかりに渦巻くのだった。香織はそれを目にしたことがあった。そこにあつたのは灰だった。

香織は昔にも見たことがある。強い光と灰。

香織ちゃん。ほら、もういないよ。

なんで、そんなことしたの？

え、香織ちゃんが、死んでほしい、って

あんたが死んじゃえばいいのに。

.....

「大丈夫ですか？」

さきほどのヒステリー教師が香織の顔を心配そうに覗き込んでいる。香織はわれに返った。大丈夫です、と言って、頭を振り、過去の映像を頭の外に追いやった。もう忘れたはずだ、と香織は自分自身に言い聞かせた。そして、目の前のものに気を集中させた。

やはり、そこには以前見たときと同じような灰があつた。以前より、広範囲に灰が散らばっている。黒ずんだ灰。見ていると君が悪くなってくるが、吐き気を我慢して香織は口を開けて突っ立っている教師たちに確認した。

「誰か、この灰に触った人はいますか？」

一人の男性教師が手を上げた。

「最初に発見したとき、なんだろうと思って、指で触りました。いけなかつたですか？」

その男性教師が自分はいけないことをしてしまったようにオロオロして聞いたので香織は軽く微笑みを作つて言った。

「いえ、しょうがないことです。触るなどというほうが無理がありませんもんね。でも、これからは誰にも触らせないようにしてください。」

あの女性教師が尋ねた。

「触らせないでください、ってことは何かあるんですか？」

香織は先ほどの表情とは打って変わって、厳しい顔をして言った。

「事件の可能性があります。鑑識を呼んでこの灰を調べてみようと思います。ですから、この灰には触らないでくださいね。」

彼らはおのおのにうなずいた。どうやら、事態の深刻さがわかってきたようだった。香織の中では、はっきりとした考えが組みあがっていた。

この灰は人がある方法で殺された証拠だ。

そんな思いを胸に香織は警察に通報　我が家に電話するようなものなので、連絡といったほうが正しいのかもしれない　　した。

3 脱走

露木啓治は電車に揺られ、流れてゆく外の景色を眺めていた。

啓治が住む田舎町の風景がキャンバスに書きなぐった色のように流れていく。そこには点々と街灯の光が漂っていた。啓治の心のように今にも消えそうな光が漂っていた。

彼らが灰になって数秒の間、啓治は放心状態にあった。そして気づいた。例え、直接、手を下していなくとも自分が殺したことに間違いはないのだ。

逃げなくては。

次の瞬間、教室を飛び出していた。正門に近いほうの階段へ向かった。すると、したから誰かが上がってくる音がしたので、きびすを返し、反対側の階段へ向かった。

一階の廊下を正門のほうへ駆けていると、音を聞きつけて職員室から出てくる先生がいたが、うまくやり過ごし、学校を脱出することができた。

啓治の頭の中ではもう考えはまとまっていた。

この町から逃げる。

父が死に、家庭は泥沼になった。そんななかで、過ごししてきた。学校も家と同じようなものだった。毎日、彼らのストレスを受け止める役を演じさせられ、他の友人の冷ややかな目にさらされてきた。それが、突然、雷を出現させてしまい、人を殺して少年院行き、という悲しい戯曲を奏で続けるのなら、周囲を捨てて 捨てる価値のあるものなどないが 一人で生きていくほうがどれほどましだろうか。

啓治は息を切らして家に駆け上がった。今は、誰もいないはずだ。今の義父は寂れたスナックを経営しており、母もそこで働いているのだ。

案の定、家にはだれもいなかった。そのことを再確認した後、啓

治はお金の入った引き出しをひき開けた。銀行に預ける前のスナックの売上金がそこには入っていた。

せいぜい、数万円の札束をポケットに突っ込み、家を出た。自転車に乗って、全力でこぎだした。この一連の動作は他人から見ると流れるように鮮やかに違いない。

啓治はそれほど焦っていた。あの、現場からでは誰が犯人かはわからないはずだ。だが、啓治はこの町にあと数分でもいれば、犯人が啓治だとばれてしまうような気がした。だが、この町から出られれば、自由の身になれる確信があった。

啓治が家を出たとしてもあの親たちは心配しないだろう。むしろ、喜ぶに違いない。だから、警察に家出届けを出される心配はいらない。お金については、泥棒に入られたと勘違いするか、啓治が家での資金にかつさらったと感づくかもしれない。感づいたとしても、息子との手切れ金なら安いものだ、諦めるだろう。

駅に着くと、啓治は市の中心部への切符を買った。

そして、露木啓治は在来線の硬いすに腰掛けて、抜け殻のように、ほうけて外を眺めている。その夢中の頭の中にはある映像が反芻していた。

死にたくない。

と念じた瞬間、腹の底がグツと持ち上がるような感覚に襲われ、窓の外に意識が集中し、そこから閃光が走った。

なぜ、そんなことが起こったのだろう。なぜ、自分がやったのだと認識できるのか。啓治は自分に問いかけてみたが、答えは見つかるはずもなかった。

ふと、思いつき啓治は自分の指先に意識を集中してみた。もしかすると、あの力を自由自在に使いこなせるかもしれない。意識を集中する。目が痛くなるくらい、指先を睨みつける。しばらくそうしていたが、何も起こらず、向かいに座っていたおばさんが不思議そうに啓治を見つめているだけだった。

もうすでに、窓の外には看板のネオンの光や、ビルの窓から漏れ

る光がキラキラと輝いていた。

啓治は終点の市の中心で降りた。駅を出ると、帰宅する途中の人ごみの中に出た。制服姿の学生はちらほら見えるが、啓治は、制服を着て帰る当てもなく歩いている自分が浮いているような気がした。この人たちはみな帰るべき場所を持っているのだらう。生活や周りの環境がどうであろうと、帰るべき場所があるというのは、この上なく幸せなことだということを、露木啓治は、失って初めて気づいた。

啓治は心の支えを失ったような感覚を覚えたのと同時に、外が寒いことに気がついた。冬と春の間。もうすぐ自分には春がやってくると、期待していたのに、自分の冬は永遠に終わらないのだと啓治は察した。これからどうすればいいのだ。

人の流れからはぐれ、暗く人気のないところに引き寄せられるように、歩いた。

たどり着いたのは少し大きな公園のようだった。街灯はどうやら壊れているらしく、点いていなかったたので、辺りはよく見えなかった。

啓治は近くにあった木製のベンチに倒れこんだ。啓治は寒さを防ぐために、制服をかき合わせ、まるくなって眠りへと落ちていった。空には星が漂っていた。

3 脱走（後書き）

感想をお願いします。

4 公園

父、母と遊んでいる露木啓治がいる。啓治の両脇にいる二人はさわやかな笑みを啓治に投げかけている。

そんな中、あたりが一瞬にして闇に包まれた。かろうじて啓治には両親の姿が見えた。助けて、と父に請う。父の表情が曇ったかと思うと、背を向けて闇の奥へと歩き出した。啓治は必死で父を追ったが、とうとう父は見えなくなってしまった。

今度は振り返って、母に、怖いよ、と助けを求めてみた。よく見ると母の隣には見知らぬ男がいて、啓治のことを笑ってやはり、背を向けて闇の奥へと歩き出した。啓治は泣きそうになりながらも彼らを追ったが、追いつくことはできなかった。

それと入れ替わりに、友人の三人が歩み寄ってきた。啓治は友達なら大丈夫だと思つて笑顔を見せた。しかし、三人はナイフを構えて突っ込んできた。

ヤメテクレ。シニタクナイ。

音のない光が彼らを灰にした。その灰は異形の塊となつて啓治に襲い掛かつてきた。

「大丈夫か？」

ひげが伸び放題の男が露木啓治の顔を覗き込んでいた。

自分が公園で寝てしまったことを啓治は思い出した。上半身だけを起こして、大丈夫だ、といおうとしたその直後、猛烈なめまいが彼を襲った。

起き上がった途端によろけた啓治を見て男は言った。

「ああ、熱があるな、こりゃ。」

啓治はその言葉を聞くか聞かないかのうちに、また倒れこんだ。

寒い、いや、昨日の寒さと比べると、断然こちらのほうが暖かい。目覚めると、啓治はビニールテントの中に寝かされていることに

気づいた。啓治が起き上がった。ちようどそのとき、テントの入り口にあたる垂れの部分から男が入ってきた。

顔はひげと伸びきった髪の毛で隠れている。手には千円札を一枚握り締めている。着ている服は黒ずんで、地色が何色だったかが想像できない。

目を覚ました啓治を見て男は聞いた。

「まだ、頭が暑いか？お前、もう二日も寝っぱなしだったんだぞ。」
普通なら、こんな怪しい男からは逃げるべきなのだろうが、啓治はこの男は悪い人ではないと思っていた。二日寝込んでいたということは、この男が看病してくれたに違いない。

よほど、善良でない限り、ベンチで死にかけている子供なんか拾って帰らないだろう。なにより、啓治はこの男にどこか懐かしいものを感じていた。ひげ面のなかに垣間見えるふやけた笑顔が印象的だった。

「うん、大丈夫。看病してくれてありがとう。僕はこれで失礼します。」

啓治は迷惑をかけたくなかったので早く出て行くこととした。その男は手で啓治を制して言った。

「どうせ、家出だろ？俺んちはこんなんだが、寝床ぐらいは貸してやるぜ。」

啓治は男のいたずらっぽい笑みに心を許して、泊めてもらうことにした。

啓治は外の空気が吸いたいと言ってテントから出た。外はもう夕方過ぎだった。そのテントは啓治が倒れた公園の隅に建てられていた。ある程度察しはついていたが、どうやら彼はホームレスのようだ。辺りを見回すと、同じようなテントが点々と設置されている。この公園はホームレスのたまり場なのだろう。外の空気を胸いっぱい吸った。なんとも親切な人に出会えたものだ。

啓治はテントに戻った。すると男はコンビニの弁当を食べるといって、差し出してきた食べ物を見ると、胃が痛くなるほどおなか

減っていることに気づいた。

啓治は遠慮なくがつついた。弁当のふたの賞味期限が過ぎていたが、そんなこと気にならなかった。男は、コンビニから期限切れの弁当を特別なコネで貰っているのだと、自慢げに言っていた。

啓治の弁当が空になったころ、男は啓治の名前を聞いてきた。啓治は名前を隠す必要はないと思ったので正直に言った。

「露木啓治といます。」

啓治の目に不思議な光景が飛び込んできた。男が啓治の名前を聞いたとき、一瞬顔をしかめたのだった。

男は啓治が不思議そうに自分を見ていることに気づき、言った。

「いやあ、な。どこかで聞いたことあるような気がしたただけ。よく考えると、実際、俺には知り合いなんていないからな。」
また、独特の笑みをまた見せた。

啓治はその後も、自分が家出をしてきたことと、これからどうすればいいか迷っていることを打ち明けた。もちろん、人を灰にしてしまったなどは口が裂けても言えなかった。

今度は入れ替わるようにして、男が身の上話を始めた。

彼は、数ヶ月前からホームレスになっただけ。最初はなれるのに大変だったと笑い飛ばしていた。床屋に行く金もないからこんな風になってしまったと、汚れた長髪をいじりながら説明してくれた。今は、空き缶を集めて売っているらしい。先ほど彼が握っていた千円札はその報酬だったらしい。

彼の話聞いてるうちに、外は暗くなっていた。

啓治は床に就いた。

夜空の星は昨晚よりも明るく輝いていた。

4 公園（後書き）

感想をお願いします。

えー、感想をお願いします。

5 仮説

人が雷なんか出せるわけがないだろ。

谷岡香織は上司に何度も説明したが、それと類似した言葉しか返ってこなかった。はじめから期待していたわけではなかったが、予想以上に疲労がたまった。

鑑識がああ灰を調べた結果、三人の人間がそうだったのだとわかった。

灰を発見したあと、警察官が現場を調査した。あの教室からわかったことは、窓ガラスは外側から何か強いものでたたかれて割れたらしい、ということと、現場にナイフが落ちていたことぐらいだ。それと同時に、香織は教師たちに、生徒全員の家を電話をかけさせた。香織の予想通り、三人の生徒がまだ帰宅していないということだった。

彼らの髪の毛と、灰は同じ人間のものと確定された。

警察では捜査が困難を極めていた。もうあの事件から1ヶ月は経過していた。現場に残された物のつながりがほとんどないからだ。

後の調査でわかったが、彼ら三人は仲がよく、いつも行動をともにしていたようだった。現場のナイフからそのうちの一人の指紋が見つかった。

そのことから、三人が仲間割れしてナイフまで出てきたと仮定すると、なぜ、彼らは灰になったのか。なぜ、窓ガラスが割れたのか。現場で目撃された強い光は何だったのか。一貫性がまったく見えないう。そのほかの説も同じ道をたどった。

そこで香織は雷の能力者の仕業だと上司に訴えたのだった。

香織の仮定はこうだ。三人の少年と能力者とナイフの関係はわからない。だが、確かなのは、能力者が三人を深く憎んでいたことだ。そして、能力者は未熟で力が暴発したに違いない。そして、窓ガラ

すまで割ってしまったのだろう。もし、使い慣れた人間なら、三人を殺すのに音もなく殺す道を選ぶだろう。この仮定ならばつじつまが合う。

だが、上司はこれを夢物語だと解釈して、香織をのけ者扱いにしてしまった。

こうなったら、一人でやるしかない。そう思い立って、地道に聞き込みを続けていた。学校の近くの家の人を中心にあの事件に関する、目撃情報を探っていたのだ。

きつと、未熟な能力者は殺人犯が自分だということがばれるのを恐れて、急いで逃げ出したに違いない。

だが、収穫はゼロに等しかった。

改めて、その能力者の立場になって考えてみたが、すぐに吐き気がしてきた。

彼女のことを脳裏をよぎるからだ。

その人が嫌いだな。と思ったらすぐにやっつけちゃえるんだよ。

え、すごい。

でもね、今は雷が私の言うことを聞くけどね、昔はよく爆発してた。

かみなり？ゆりちゃん。それは、雲の静電気がなんとかして起きるんだよ。

私、出せるよ？それで親に嫌われてたの。いないように扱われてたの。

ゆりちゃん、バカじゃない？雷なんかだせないの。

.....。

ゆりちゃん。

彼女に助けを求めるのはどうだろうか？

香織は自分が馬鹿げた考えを巡らせていることに気づいた。彼女

が今どこにいるかもわからないのに。しかも、自分の大切なものを奪った悪魔なのに。彼女が自分のことをうらんでいるかもしれないのに。

香織は黙々と聞き込みを続けるしかなかった。

5 仮説（後書き）

あー、感想お願いします。

6 希望

露木啓治は仕事から帰る途中だった。

啓治の中では希望が渦巻いていた。新しい生活を始められたこともあるのだが、それに今日は初めての給料を貰ったのだ。それを貰ったことで生きているという実感がより強くなった。それを啓治はひしひしと感じつつ通りを公園に向かって歩いていった。

あの男、いや野田隆は啓治と一緒に住まわせてくれた。さらに、野田は啓治の履歴書を偽造してくれたのだ。過去に履歴書をよく手にする仕事をしていたそうだ。

それを使って、近くの会社に就職することができた。その会社はパソコンやオーディオなどの電化製品を修理するという小さな会社で、なおかつかなり技術の求められる仕事だったので、人手が不足していたようだった。

啓治は小さいころから機械いじりが好きで、家の電化製品を直しては家族に喜ばれていた。昔の家族に。それで、入社テストとしてオーディオプレイヤーをさっと直すと、即戦力だ、と喜ばれ、採用された。啓治はともうれしかった。人に認められるということなど、あることすら忘れかけていた。

履歴書の上では啓治は二十一歳となっている。しかし、啓治は背も高く、顔も大人びているので、まったく疑われはしなかった。体格がひよろつとしてしているのは現代の若者の特徴だと思ってくれたのかもかもしれない。

そして、大手の電気店で修理してもらうよりも、早く、安く、確実に、対応がよいとそこそこ評判で経営は軌道に乗っていた。

入社テストの翌日から啓治は有能な戦力として働いた。最初はオーディオなどしか直せなかったが、社の先輩に教わってパソコンもいじれるようになってきた。そして、一ヶ月が経過した。

啓治はいまどき珍しい、給料袋をかばんに潜ませて気分を高揚さ

せて歩いていった。コンビニで弁当とカップケーキを買った。いつも残り物ばかり食べている野田に向けてのものだった。

さすがに、新入社員の啓治はなけなしのお金しかもらえなかったが、今の生活と比べると、格段に質が上がるだろう。なので、そんなに贅沢はできない。そのことから、啓治の指針はカップケーキでおさまったのだ。

そんなことを考えているうちに、テントのほうについた。中に入ると、野田が座って新聞を読んでいた。たぶん公園のゴミ箱から拾ったのだろう。

市内のゴミ箱というのは以外に情報の宝庫なのである。毎朝のように、新聞を買い、捨てる人がいるからだ。家に持ち帰るとゴミになるからだろう。それを利用すれば、無料で多数の新聞社の情報が毎日手に入る。野田も毎日チェックしていて政治などにはめっぽう詳しくかった。

それを真似て啓治も新聞を読み始めた。すると、以前父に責任転嫁した社長は都心部の高級住宅地に住んでいるということがわかった。

それを見て啓治は非常に腹が立った。家を出て自分はぎりぎり生きていくというのにこの男はなぜ贅沢三昧で暮らしているのだろうか？腹が立ちすぎて、新聞を破り捨ててしまった。

啓治はそれでスツとした。今までは物に当たるなどなかったことだったからだ。ずっと我慢してきた。

すると、啓治をいじめていた三人はどれほどスツとしていたのだろうか？いや、ストレスがたまりすぎて追いついていないから、いじめ続けたのかもしれない。さらに、そのストレスは彼らの思い込みから来るものであったに違いない。自分たちは普通すぎてストレスを発散できていない。こんな思い自体がストレスになったのではないか？

野田は、晩飯だぞ、と言って、コンビニ弁当を差し出した。さすが、啓治は野田に買ってきた弁当を差し出した。野田の表情はす

ぐさま明るくなり、持っていた古い弁当を放り出し、啓治に礼を言った。

啓治は弁当を食べながら、野田のほうを見た。うれしそうにがついている。一瞬、微笑ましいな、と思ったのだが、その後、ある大きな感情が押し寄せてきた。

このままここにいていいのか？

それは野田を心配しての言葉ではなかった。自らを懸念しての言葉だ。こんな見ず知らずの赤の他人に程近いようなやつと一緒にいてもいいのか？いや、いいはずがない。自分はまだまだ、若い。これからの夢もある。しばらく、給料を稼いでから出て行かなくては。しかし、野田を見ていると哀れな気もする。自分を助けてくれた人を裏切るといふのは、相手が誰であろうと、苦心を伴わないはずがない。どうすればいいんだ？

野田は弁当を食べ終え、カップケーキを食べながら聞いた。

「露木君。一体どうしたんだ？」

野田は啓治を露木君と呼んでいた。啓治は給料袋をかばんから出しながら、答えた。

「今日、初めて給料を貰ったんですよ。ほら。」

野田はまるで、自分が給料を貰ったかのように喜んでくれた。

「よし、これから頑張れ。」

野田は啓治に言った。

また、そんな彼の言葉が胸に響いた。がんばれ、なんて誰も言うてくれなかったからだ。野田は啓治がここしばらく言われなかった言葉をたくさん投げかけてくれた。

どうすればいいんだ。

そんな思いを胸に一日が終わった。

6 希望(後書き)

よし、感想お願いします。

谷岡香織は自分の説を通すために、聞き込みを続けていた。そのうち、彼女の聞き込みの範囲は、学校周辺の住宅にとどまらず、あの中学校の生徒の家を回るようになっていた。

時には、刑事が聞き込みに来る、とうわさが回り、インターホン越しに、結構です、と門前払いされることもしばしばあった。

だが、そんななか、一軒の家に当たった。

出てきた女性は酔っていた。顔はやつれていたが、もともとは美人だったろう、と香織は思った。何とか家に入りこみ、質問を始めた。

お宅のお子さんは 香織は常に携帯している資料を見る。その中の「露木 啓治」の情報が書かれた部分を探し当てて言った。

「あの事件の後学校を休んでいますね」

露木夫人はその質問を聞いたとき明らかにビクついた。酔っているせいかどうかはわからないが、しばらく考えてから言った。

「そりゃ、そうですね。三人も灰になったんだから。他の家の子供だって休んでるでしょ？」

確かにそうだ。あの後、生徒の親たちのなかには子供の身を案じて学校を休ませた人が多くいた。これまでに聞き込んだ人の中にも心配だったから休ませた、という話も出てきていた。だが、卒業式近くになると親も安心したのか学校に来るようになっていた。

しかし、露木啓治は違う。

「露木さん。そちらのお子さんはそれ以来、学校に行ってませんよね？今、彼の年齢ならば高校生のはずです。学校に行かれていますか？」

露木夫人の顔は先ほどのビクつきと比べ物にならないほど変化を見せた。そして、彼女は、たまりにたまった何かを吐き出すように泣き出した。

香織はその何かをすくいとった。彼女のなにかのすべてを受け止めることはできないが、彼女の助けになりたかった。

彼女は香織に話した。露木啓治がお金をとって家出をしたが、警察にも学校にも報告しなかったこと。露木啓治の父は会社の権力によつて、家を出て行ってしまったこと。再婚相手の露木氏には愛人がいるらしいこと。スナツクの経営が行き詰っていること。

香織はできる限り彼女のためにすくいとつてあげた。

最後に露木夫人は息子に会いたいと言った。

香織は彼女を励まし、息子さんを探します、と約束して家を辞した。

香織は搜索願を出すために所に戻った。

ロビーにいた先輩刑事に香織宛の電話があつたことが知らされた。誰だろうか？香織は自分の机のある部屋に移動する途中に考えた。

向こう側は名前を名乗らなかつたらしい。電話番号だけ言ってかけなおしてください、と切って切ったそうだ。

先輩の言つとおり、机の上に電話番号の書いた紙が置いてあつた。

香織は机に据えてある電話にその番号を打つ。

「谷岡香織ですが」

「ああ、笠井ゆりです。久しぶり、香織ちゃん」

ゆりちゃん

7 ゆり(後書き)

感想をください。

8 裁雷(前書き)

遅れました

8 裁雷

啓治はまた走っていた。あの雷を出現させ、急いで町を出るときのように。人ごみを駆け抜ける啓治を人々が不思議な面持ちで振り返る。

もう、ここにはいられない。啓治はついさっき起こったことを頭の中に思い起こしながら思った。

また、殺ってしまった。

啓治の機械修理の腕は大いに役立ち、店の売り上げがすこしよくなるほどだった。それは、啓治の腕がいいだけではなく、氣立てがよく、真面目な好青年が働いている、ということもあってか、啓治を見に来る客までいたからだ。その調子で啓治の活躍はもう一月を数え、二回目の給料をもらったのだ。

また啓治は給料袋を鞆にいれ、気分を高揚させて歩いていた。そして、またコンビニでささやかなデザートを買った。

テントに帰り着くとさっそく二人で食べ始めた。野田はお礼を言い、弁当を食べ、お礼を言い、弁当を食べを繰り返した。そんな野田を見ながら啓治は、最近考えている事を実行しようと決意した。それは、啓治がある程度お金をためたら、ささやかなアパートに移り、野田にも働き口を見つけてやり、啓治は自分の道を歩むという計画だ。賃貸情報誌で安いアパートのめどもつけている。計算するとあと、数ヶ月働けば、実行に移せるのだ。

野田は今日もらったというお金を啓治に見せた。今日は空き缶の集まりがよく、いつもより、多くのお金をもらえたらしい。啓治は日々の順調さを胸にかみ締め、床についた。

誰かが何かを探っている。そんな漠然とした考えが啓治の脳裏をよぎった。啓治は目を開けたが、念のため、体は起こさない。啓治は

横目で自分の右手のほうを見る。思ったとおり、何かが動いている。暗闇に目が慣れていないせいで、何かの輪郭がぼやけて目に映るだけだ。啓治はその何かのいるところには自分のかばんが置いてあることを思い出した。そして、その中には給料袋があることも。

「誰だ！」

啓治は叫ぶと同時にその何かに & a m p ; # 2 5 6 8 1 ; みかかった。啓治の目に何かはつきり映った。野田だった。

野田は啓治のかばんをあさり、給料袋を握り締めていた。野田は言った。

「許してくれ、借金取りがオレの居場所を突き止めやがったんだ。金が必要なんだ。助けてくれ」

啓治は弁解する野田を冷やかな目で見ながら言った。

「それならどうして夜中にこそこそ金を取るんだ？僕にいつてくれれば金は貸したさ。なぜだ？いつてみる」

野田は返答に詰まった。

啓治は声を荒げて追い討ちをかける。

「金がほしかったただけなんだろ！夜中に盗んで逃げようという魂胆だったんだろう！」

啓治はこれが間違いであることを期待したが、暗闇になれた啓治の目には野田は凶星であることが手に取るようにわかった。

「残念だ」

啓治は低く言った。そして、右手を真横に突き出した。

「なんだ、それは？」

先ほどの啓治の詰問と今見ている啓治の手のひらの上にあるものを見たせいか、声が震えていた。

啓治の軽く開かれた右手には光が凝縮した球が握られていた。その球のなかでは雷が渦巻いているのが見える。だが、音はない。音のない光が啓治の手の右手に握られている。テントの中は適度な光で満たされ、啓治と野田の顔の影が濃く浮かんでいた。

信じていたのに。

啓治は光の球を野田に突きつけた。一瞬、テントが光のみで張り裂けそうなくらい光った。

野田は一瞬で灰になった。

啓治は荷物を持って、テントを抜け出し、全力で駆け出した。

もう、自分は逃げられない。

啓治は始発電車に揺られながら考えた。生まれ育った町を出たときのように流れる風景を眺めていた。そして、今からのことを計画した。まず柱は決まっている。

東京に行く。そして、父殺しの社長、塚原久雄を殺す。

9 過去（前書き）

かなり、放置していました。
もう書き上げてあるので、定期的に更新します。

9 過去

谷岡香織と笠井ゆりは仲のよい友達であった。香織は気が強く思ったことははっきり言う子だった。ゆりのほうはあまり、人付き合いはよくなく、何か影を抱えたような子であった。香織はゆりのそんなすこし影のあるところを魅力的に思い、親しく付き合っていたのだ。ゆりのほうもクラスの人気者の香織のほうから親しくしてきたので喜んで友達づきあいをはじめたのであった。

しかし、その関係は二人が中学三年生のころに崩れてしまった。

ゆりはあることを言おうか言わないか迷っているようだった。香織はよくクラスの中で使用する笑みでゆりを促した。すると、ゆりは決心して顔を明るくして話し出した。

「わたし、嫌いだな、と思う人はすぐにやっつけることができるんだ」

香織は彼女の言っていることが理解できなかった。

「それって、どういうこと？」

「あのね、私には雷が出せるんだ」

香織はいつもおとなしいゆりがそんなことを言い出したので笑ってしまった。

「ゆりちゃん。雷つてのは雲の中で静電気がどうこうなつてできるんだよ。人が雷なんか出せるわけじゃないでしょバカじゃない」

ゆりは黙り込んでしまった。でも、しばらく考えた後、ゆりはわかった、というような顔をして言った。

「香織ちゃんは嫌いな人いる？」

香織は右上に眼をやりながら思い出すしぐさをした。

「えっと、父さんと母さんかな？昨日ねえ、大喧嘩したんだ。勉強しろ勉強しろってうるさくてねえ。まったく死んじゃえばいいのに」その後、とりとめもない話した後二人は別れた。香織はその後、

親と会うのを避けて映画館で映画を見てから夜遅くに帰宅した。

香織が帰宅してから見たもの。それは灰であった。香織の父と母の成れの果てであった。その灰の前には笑顔のゆりが立っていた。

「香織ちゃん。もういないよ。香織ちゃんの父さん母さん」

香織はゆりの目の前に駆け寄り、灰とゆりの顔を見比べてから言った。

「ゆりちゃん。この灰は？」

「え？香織ちゃんが嫌いって言ってた父さん母さんだよ」

香織にはゆりにそのことを聞く前に灰が生みの親であることはわかっていた。ただ、信じたくなかっただけだ。涙は出なかった。ただ声が震えていた。おそらく、ゆりの前ではなきたくなかたのだろう。「どうしてこんなことしたの？」

ゆりは香織の様子にたじろぎながらも答えた。

「だって、香織ちゃんが、死んでほしいって」

「バカ！ゆりちゃんが死ねばいいのに！出て行って！」
それから香織はゆりちゃんとは会ってない。知らないうちどこかへ引越したらしい。香織の両親は原因不明の事故死として片付けられた。香織はゆりちゃんのことを警察に話したが信じてもらえらなはずもなかった。人間は雷なんか出せないんだよ、と言われた。後になってわかったのだが、ゆりちゃんの両親も灰になって見つかったそう。ゆりちゃんは祖母と二人で暮らしていたらしい。

「香織ちゃん？」

香織はわれに返る。電話を持ったまま放心状態にあったようだ。

「ゆり……ちゃん？」

「うん」

「どこにいるの？」

「うん。それは秘密」

香織はゆりはなし方が変わっていないことに気づいた。声は多少落ち着いたようだが、話し方にはまだあどけなさが感じられる。

「香織ちゃん、警察になつたんだよね？」

「どうして知ってるの？」

「私は香織ちゃんのことなら何でも知ってるから」

香織は背筋に冷たいものを感じた。

「そんなことはどうでもいいの」「ゆりの声が強くなった。」「今から、香織ちゃんに会いたいんだけど」

「どうして？どうして貴方なんかに会わないといけないの？」

知らず知らずのうちに声が大きくなっていった。同じ部屋にいた同僚たちがこちらを振り向いた。

「今回の事件、能力のある人がかかわってるでしょ」

「まさか……」

「香織ちゃん。それは違うよ。決して私じゃない。とにかく会ってほしいの。再来週の日曜日のお昼に駅前の喫茶店で」

それで電話は切れた。香織は頭を抱えた。何をたくらんでいるのだろう？でも、行くしかない。この事件を解決できるかどうかで私の一生が左右される、香織は思った。

その後、また人の灰が見つかったと連絡が入る。

啓治は東京にある塚原久雄の家を数区間ほど離れたウィークリーマンションから監視していた。野田にもらった偽の履歴書がここで役に立ったのだ。一週間ほど監視を続けると塚原には一人娘がいることがわかった。彼女は近くの私立大学に通う女子大生であることもわかった。啓治は彼女を利用することにした。

街中で話しかけると意外と簡単に誘えた。彼女は背の高い啓治を同じ年くらいに見たらしい。近くの喫茶店に入った。

彼女は名前を咲といった。啓治はわざと本名を名乗った。相手は何も反応を見せなかった。塚原は自分の娘に自分のしたことを言っていないのだろうか。いや、もしかすると、啓治の父を追い詰めたことは知らせていても息子である啓治の名、あるいは存在を知らないだけなのかもしれない。しばらく話したところで彼女は啓治に愚痴を漏らし始めた。啓治は我慢して聞いてあげることにした。なんとか彼女を伝いにして家まで行き、塚原久雄を抹殺しなければならぬ。もう、僕は引き返せないのだ、と啓治は思った。

「もう、うちのお父さん、いや、あのジジイはね」
彼女は父が暴力を振るうことや愛人がいるらしく、母と仲たがいをしていることや、会社の経営が危ういことなどはなした。啓治はあの男ならやりかねないと心底思った。あの男の娘に生まれた咲をかわいそうに思った。

それから、一週間ほど、喫茶店で話したり、買い物に付き合ったり、映画を見たりして、咲とはずいぶん親しくなった。次第に啓治は咲に好意をもって接するようになった。顔立ちはそれほど良いわけではないが、最近の女の子に見られる快活な性格に惹かれていた。それは、啓治がしばらくの間そのような振る舞いをせず、暗く、静かに、孤独ともに暮らしてきたからかもしれない。啓治は自分の持ちえない部分を咲という媒介を経て手に入れようとしたのかもしれない。

ない。そして、内心で塚原久雄を殺すことの意味の中に、彼女を自由にするというそれも見出していた。

咲と知り合ってから、初めて家に呼ばれた。まさかこのように事態が好転するとは啓治も思っても見なかった。距離を置き、警戒の目で見つめていた悪の城が目の前にある。啓治の胸は高鳴ってきた。門をくぐるとマンションからは見えなかった内装が視界に飛び込んできた。過去に想像していたように、家の中は塚原久雄の生み出した利益が存分につき込まれているようだった。家に入るためには洋風の庭をしばらく歩かなければならなかった。庭の端のほうで、庭師が植え込みの手入れをしているのが見え、反対側の隅では体のがつしりした黒く大きな犬を調教しているものも見えた。犬は五、六匹彼の周囲に腰を下ろしていた。

玄関で靴を脱ぎ、階段を上り、二階の大きな部屋に通された。部屋の両端には体の大きなボディガードらしき男たちが、西洋の騎士の鎧の置物のごとく佇み、部屋の中央には、ある男が立っていた。啓治の隣にいた咲は彼の元を離れ、中央の男のもとへ走って行き、男の影に隠れた。そう、塚原久雄の影から咲はこちらを睨んでいた。久雄は口を開いた。

「ようこそ、忌々しき男の息子君」

啓治は体の中から噴出す何か気持ちの悪いものを感じたが、なんとか自分の体のうちに抑えた。そして、久雄のことを観察した。べつとりと彼の頭から足の指先まで、恨みを塗りつぶすように観察した。少し毛の薄くなった頭に、目は大きく見開き、ひげを整え、若干黄ばんだ顔に中年太りし、全体的に寸胴な体つきで、指にはいくつか指輪をはめて、こちらを見つめ汚い微笑を見せていた。啓治は見ているのが億劫になり、顔を背けて言い放った。

「咲、どうして、そいつのほうに行くんだ」

咲が口を開きかけたが、久雄がそれを制し、説明しだした。

「すべて、こちらの作戦通りだ。君はここで死ぬのだよ。君が事件を起こしているのは警察から聞いている。ある一人の刑事から漏れ

た情報だそうだが。そして、君の行方がつかめないと聞いて、私は思ったのだよ、あの男の敵討ちに来るだろうとね。そこで、咲に君を家に連れてこさせようとして、一週間ほどデートさせてあげたわけだ。もしかして、自分の力だと思ったかね？咲ほどの子が君なんぞに振り向くと思っただか？」

啓治の鼓動は自分が死ぬという話以上に咲に裏切られたことに早くなっていた。

「本当なのか？咲さん」

咲は久雄の影から言った。しかも、啓治が今までに見たことのない顔で言った。

「当たり前でしょ。あんたなんかと一日でも一緒にいるだけで勘弁して欲しいぐらいだったのに、一週間は正直つらかったわ。でも、一週間も嘘つきっぱなしだったのは初めてだから楽しかったかも」啓治はこらえてもうひとつ、久雄に向けてたずねた。

「それに、どうしてお前なんか警察が情報を流す？僕をおびき寄せて殺して何の意味がある？」

「会社の為だよ。そろそろ警察にもコネが欲しいと思ってね。この計画が成功して、お前の死体を警察に引き渡せば今後いろいろ役に立つんでね。ウチのような一流の会社は警察ともかかわりぐらいるのだよ」

啓治は両手を前に突き出し、意識を集中させた。その瞬間両手から啓治の身長ほどの音のない光が瞬きだした。その大部屋にいた者たちは目を見開きその光に見入った。

「消えてくれ」

啓治が言い放った時、久雄と啓治以外の人間は部屋にはいなかった。その代わりに大量の灰が床を覆いつくしていた。啓治はしりもちをついて震えている久雄のほうへ歩み寄った。「それはなんなんだ？」久雄は震える声で言った。

「よくも、父さんを殺したな」

啓治は久雄に雷を突きつけた。久雄は光を目の前にして、言った。

「なに？やつは自殺していないはずだ。部下に監視させているが、
どこかの公園でホームレスをし……」

「だまれ！」

啓治は久雄を灰にした。

「わかったわ」

二人は喫茶店を後にした。

11 再会・脱出

香織はゆりの指定したとおり、駅前の喫茶店に来ていた。約束では昼に会うことになっていたが、午前中から香織は来てしまっていた。会いたい、というわけではないが、どういつつもりなのか不思議でしよがなかつたのだ。

一時ごろになって彼女は現れた。何年ぶりだろうか。彼女の顔は変わっていなかった。悪い意味ではなくて、悪気のない潔白な顔。香織の両親を灰にしたときの、放った台詞のときもその顔だった。あまりに顔が変わっていないので、香織はあれから時が進んでないのではないかと錯覚を覚えた。

「香織ちゃん？」

香織は上の空になっていたことに気づいた。ゆりは香織の向かい側に座った。

「本当に久しぶりだね。いつになっても香織ちゃんはかわいいね」
ゆりはゆっくりとした語調で話したので、香織はそれを制すように言った。

「そんなことはどうでもいいの。電話で話していたことを聞かせてくれる？犯人がわかるの？」

「ああ、そのこと？今から公園に行かない？」

「私はふざけているわけじゃないの」

「私もふざけてないよ。公園に行けばみんな終わるから」

香織はゆりの目が真剣であることに気づいた。

「わかつたわ」

二人は喫茶店を後にした。

啓治は屋敷を出て走っていた。犬が庭の隅から息を荒くして走ってくるのが見えた。啓治は指先から光を放ち、犬を灰にした。そし

て、近くの公園に逃げ込み、呼吸が落ち着くのを待った。誰も追つてこないのを確認すると、空を見上げた。抜けるような晴天だった。雲がひとつもなく、突然重力が反転して、空の底へと落ちていっても不思議ではないような気になった。気持ちも落ち着いたので、辺りを見回した。公園は比較的大きいもので、ここにもホームレスが住み着いているようだった。テントがいくつか張ってあった。それを見た瞬間、何かが啓治の中で重なった。つい先ほど久雄が言い残した言葉を思い出したのだ。

なに？ やつは自殺してはいはずだ。部下に監視させているが、どこかの公園でホームレスをし

啓治は駅へ向かい、電車に乗り込んだ。啓治が見えなかったほうの空には雲が立ち込めていた。

12 雷放

空は今にも泣き出しそうだった。啓治はかつて、野田と住んでいた公園を訪れた。テントがあつたところには何もなかった。どう考へても、野田は啓治の父親だった。偽名にだまされていたのだろうか。啓治は何故自分が気づけなかったかがわからなかった。もしかしたら彼は自分のことを気づいていたのかもしれない。そんな思いで、彼は空を見上げた。大粒の雨が落ちてきた。

ゆりと香織もそのとき公園にたどり着いた。ゆりは香りから離れ、啓治のもとへ歩み寄つた。そして、啓治に話しかけた。香織はその様子をたつたまま見ていた。

「露木啓治君だよね」

啓治は驚いて、自分よりも少し背の低いゆりを見た。香織も驚いていた。家出した露木啓治がここにいて、その子の名前をゆりが知っていることに驚いていた。

「どうして、僕の名前を？」

「私は、啓治君のことなら何でも知っているから」

ゆりは無邪気な顔で笑つた。公園にいたホームレスはみな雨が降つてきたのでテントに戻つていた。香織と啓治とゆりの三人はずぶぬれだった。

「警察ですか？」

啓治は手のひらに光を蓄えながら、ゆりに尋ねた。ゆりは啓治の手を押さえていった。

「だめ、そんな力は使っちゃダメ。私もその力で、大切な人の大切な人を殺してしまったの。あれから私は反省しても仕切れなくて、一度死のうかとも思つたけど、それじゃあ、香織ちゃんに申し訳が立たないと思つて、毎日、反省していたの。そうしたら知らないうちに雷が体から抜けてしまったの。きつとそれは怨みの力なの。とても悪い力なの。この世に生まれてはいけない力なの。私はこれか

らも死ぬまで香織ちゃんに反省して生きていく。私が生きることが私にできる誠意一杯のことだと思つた」

ゆりは涙を流していた。雨で顔もぬれていたが、香織にはゆりが泣いていることがわかつた。おそらく、ゆりが泣くところをはじめてみただろう、と香織は思った。いままではあの力があつたためにゆりは泣けなかつたのだらうか？香織はゆりを許しはしないが、もう悪くは思わないつもりだつた。

啓治はそんなゆりを見て、手の雷を空に打ち上げた。初めて彼の光は鳴つた。彼の光は鳴いて、暗雲へと吸い込まれていった。啓治の目にも涙が溢れ出した。空からは雷の音がしだした。啓治はひざまずき、うずくまって泣き出した。啓治は力が目覚めたとき以来はじめて鳴いていることに気づいた。今は、体が軽かつた。先の放電でおそらく力が抜けたのだらうと思つた。ゆりは中腰になつて啓治のことを暖かく包んだ。啓治は母のことを思い出した。昔はやさしかつた母のことを思い出した。そして、家に帰りたと思つた。

ひとしきり、雨が降り続いた後、空は光を取り戻した。

12 雷放（後書き）

滞ってしまいましたが、何とか終わらせることができました。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6074a/>

ヴァジュラ

2010年10月28日06時56分発行